

## 本所・深川 地域トリビア

### 『歌舞伎と本所・深川 其の一』

今年（平成二十六年）の四月二日に新しい歌舞伎座が開場し、現在一年間のこけら落とし興行が行われています。昨年暮れから十八代目中村勘三郎、十二代目市川団十郎と相次いで大看板を亡くし、歌舞伎の危機とまで言われましたが、残された坂田藤十郎、尾上菊五郎、松本幸四郎などの大看板はもとより、父親を亡くした市川海老蔵、中村勘九郎や七之助など若手の頑張りによって、毎日満員盛況が続いています。

歌舞伎は、江戸時代には庶民の芸能として人気がありましたが、現代も興行を続け伝統芸能としても生き続けています。時の幕府の政策により度々規制を受け、天保の改革によって浅草の外れの猿若町（さるわかまち 現在の台東区浅草六丁目）に追いやられていました。その時の代表的な劇場は、市村座、中村座、森田座（または河原崎座）であり「猿若三座」と呼ばれました。

現在の歌舞伎座は明治二十二（1889）年十一月に木挽町（こびきちょう、現在の中央区銀座四丁目）の地に開場しました。明治になって、時の政府が「東京の中心にパリのオペラ座のようなもの

を造ろう」と考えて、この地に歌舞伎座を造ったのですが、木挽町は猿若町に移される以前の森田座があったところです。歌舞伎座は明治、大正、昭和、平成と120年を超える時を経てきました。その間、火災、震災や戦災に遭い、損壊や焼失を繰り返しましたが、その都度復興して今日に至っています。



新しい歌舞伎座は第五期の歌舞伎座で、建築家の隈研吾さんの設計によるものです。基本的に第四期の歌舞伎座（昭和の歌舞伎座）を踏襲しています。バリアフリーやエスカレーターの設定など年寄りに優しい設計となっていますが、劇場内部はほとんど第四期の歌舞伎座と変わらず、場内では全く違和感がありません。

歌舞伎座のこけら落としを本所・深川地域トリビアで紹介したいと思い、「歌舞伎と本所・深川」について書いてみました。

江戸時代、城東地区（本所・深川・向島）は川向こう（隅田川の向こう側）と呼ばれていました。農村地帯でしたが、江戸の中期以

降どンドン人口が増加し、開拓と埋め立てが進んで今日の形になっていき、大名の下屋敷、下級武士の住まい、寺社、農家、商家や長屋などが混在する町になっていきました。この地は、いわゆる「新開地」に当たります。そのため、古くからの江戸の庶民、農民だけではなく、新しい住人も多数入ってきて、渾然一体となった活気のある、ある意味得体のしれない町でもあったと思います。

歌舞伎と本所・深川の関わりを見ていくと、一つは歌舞伎役者であり、狂言作者であり、また演目とその舞台です。

歌舞伎役者としては、四代目、七代目市川団十郎が深川木場島田町（現在の木場二丁目辺り）に住んでいたということですが、余程歌舞伎に詳しい人でもなければピンと来ません。そこで、狂言作者を中心に見ていきたいと思います。

歌舞伎の三大狂言作者は元禄期の近松門左衛門、化政期の鶴屋南北、幕末から明治期の河竹黙阿弥と言われています。鶴屋南北と河竹黙阿弥は晩年本所・深川で過ごしており、また本所・深川を演目の舞台として何度も登場させています。この二人の狂言作者とその代表的な演目を紹介することにし、今回は其の一として鶴屋南北を紹介します。

四世鶴屋南北（つるやなんぼく 1755年～1829年）は宝暦五年に日本橋に生まれました。紺屋の息子でしたが、芝居好きが高じて狂言作者になったものの、長い下住みの人生も後半になってやっと立作者になりました。文化・文政時代の代表的な狂言作家で、約120篇の狂言を残しています。晩年は深川黒江町（現在の門前仲町）に住んでいました。七五歳で亡くなった後は本所の春慶寺（現在の墨田区業平二丁目）に葬られました。怪奇趣味や残虐な殺し場などの描写に力を入れた怪談物や市井の風俗、中でも底辺に属する民衆生活を生き生きと描いた生世話物（きぜわもの）が得意でした。

#### 『東海道四谷怪談（とうかいどうよつやかいだん）』

南北の代表的な狂言の中で本所・深川とゆかりがあるのは何といっても東海道四谷怪談です。これは彼の最高傑作と言われており、夏になると納涼歌舞伎として、必ずと言ってよいほど上演されています。今年の七月花形歌舞伎では、尾上菊之助のお岩、市川染五郎の民谷伊右衛門（たみやいえもん）で上演されました。



お岩と伊右衛門は一度離縁した後、復縁して子供ができますが、お岩は産後の肥立ちが悪く、伊右衛門は病気がちなお岩が嫌になっていました。隣家からもらった薬（実は毒薬）を飲んでお岩は醜い顔になってしまい、遂には死んでしまいます。伊右衛門は死んだお岩と自分が殺した小平の死骸を一枚の戸板の表裏に貼り付けて川に流してしまいます。お岩の顔が醜くなって、髪を梳くと櫛の間から髪の毛が抜け落ちてくるどころの描写は何とも恐ろしく、演出効果がでているところです。

第二幕は「四谷の伊右衛門宅」が舞台ですが、現在の四谷では無く、雑司ヶ谷の四谷が舞台です。

第三幕は「隠亡掘の場（おんぼうぼりのば）」で、砂町が舞台です。横十間川で釣りをしている伊右衛門のところにお岩と小平が括り付けられた戸板が流れ着きます。亡霊となったお岩と小平が、戸

板の表裏がひっくり返って代わる代わる恨み言をいう所は「戸板返し」という見せ場の一つです。この隠亡掘は寂しい砂村新田、深川十万坪という所にありましたが、現在の江東区大島、北砂辺りで、丁度小名木川と横十間川が交叉する場所です。お岩にちなんで付けられた岩井橋が近くに架かっています。

第四幕は深川が舞台で「深川三角屋敷の場」「寺町孫兵衛内の場」です。深川三角屋敷は江戸切絵図にも「三角ヤシキ」と表示されています。

大詰めは本所の「蛇山庵室の場（蛇山は今の東駒形辺りにありました）」となっておりますので、まさに本所・深川が主な舞台の狂言です。

その他本所・深川にゆかりのある南北の代表的な狂言は、

『盟三五大切（かみかけてさんごたいせつ）』

四谷怪談の後日狂言で深川八幡宮境内の二軒茶屋が舞台に出てきます。当時の門前仲町には岡場所があり、辰巳の花街がありました。塩冶浪人薩摩源五兵衛から百両をだまし取る芸者の小万は深川（辰巳）芸者です。

『於染久松色読販（おそめひさまつうきなよみうり）』

お染めの七役といって、一人の女形が七つの役を早替りするので人気があります。序幕は柳島妙見の場（現在の業平五丁目、法性寺柳島妙見堂）、三幕目が小梅煙草店の場（現在の向島あたり）です。

歌舞伎の好きな方にとっては、演目とその舞台となった場所を対比して見るのも面白いと思いますし、関心の少ない方にも城東地区に関する蘊蓄の一つになるでしょう。

河竹黙阿弥については、其の二で紹介させていただきます。

城東・江戸文化研究所